

# いじめ防止対策は、認めあえる居場所を作ること

## 「いじめ防止対策推進法」から3年

9月28日で「いじめ防止対策推進法」が施行されてから3年が経つということで、新聞等では学校のいじめ問題が取り上げられています。

法制定のきっかけとなったのは、2012年に大津市中2いじめ自殺事件が発覚したことによってです。事件がクローズアップされると、それまで泣き寝入りをしていた者たちも声をあげはじめました。

法律には、(目的)、(定義)、(基本理念)などが謳われています。いじめの定義は、『「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為(インターネットを通じて行われるものを含む。)であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。』です。

法案成立に際しては衆議院、参議院ともにおなじ附帯決議がつけました。

「一 いじめには多様な態様があることに鑑み、本法の対象となるいじめに該当するか否かを判断するに当たり、『心身の苦痛を感じているもの』との要件が限定して解釈されることのないよう努めること。」

定義を狭くとらえることがないようにという提起です。

## 教師への「管理教育」

しかし(目的)、(基本理念)に真新しいものはみつきりません。むしろ、自治体や地域の責務を謳っても、解決を学校・教師に押し付けて監視するという姿勢が見受けられます。教師に対する「管理教育」が進んでいます。

教師は、文部省—教育委員会—校長—教頭からの管理・支配をうけています。その一方で保護者、地域からの要求・監視をうけます。双方からの要求が同じ方向を向いているとは限りません。往々にして対立構造が作り出され、教師は板挟みにあつて攻撃にさらされます。

そうとらえてしまっていると、小さいいじめに気付いても、そうではないと遠ざける意識が生まれます。いじめであっても、小さいうちに自分たちで解決してほしいという“期待”をもちます。対応して問題が発覚してしまったほうが、起きたことをふくめて批判の対象にされることを想像してしまうからです。ふだんからの上司や同僚の“見て見ぬふり”からは支援を期待できません。

このような経過をへていじめが深刻化し、自殺などに至ってしまったという例はたくさんありますが、教訓が活かされていません。そこには学校という“構造”が存在します。対策には“期待”が先走ってしまう意識が生まれる“構造”にメスを入れる必要がまずあります。

そもそも教師がおかれている状況も深刻です。時間的にもゆとりがありません。子どもたちの中に入って信頼関係を強め、複雑な関係性を掌握したり気配りをするためには時間的にも精神的にもゆとりが保障される必要があります。「心身の苦痛を感じているものとの要件が限定して解釈されることのないよう努めること」には教師を取り巻く環境を含ませる必要があります。

定義は、「当該児童等が在籍する学校」が対象です。子どもたちがおかれている学校外の状況に目を向けていません。

いじめの子どもは何に怒って誰を相手に攻撃しているのでしょうか。学校のいじめ問題は、もっと社会的問題ととらえる必要があります。いじめはなぜ起きるのかということから根本的原因を探り、起こさない対策を探る必要があります。

## 『不機嫌な教室』から『ご機嫌な教室』に

4月14日の朝日新聞の「学びを語る いじめ防止」のコーナーで評論家の荻上チキさんが語っています。

「いじめを防ぐにはどうすればいいか。『道徳心を培う』など心の持ちようではなく、教員の指導のあり方など教室を取り巻く環境に着目し、いじめの発生原因を取り除こうという動きがある。

教室にどれくらいストレスの要因があるかで、いじめの発生確率は異なるという説が最近、語られています。早期発見し、解決につなげる議論に比べて低調だったいじめの未然防止を考えるうえで、重要な視点です。

ストレス要因の1つが教員の振る舞い。体罰をする教員の下ではいじめが起きやすい。問題のある子は懲らしめていい、というメッセージを発してしまうからです。服装や髪形指導も厳しいほどストレスがたまります。トラブルを見て見ないふりをする事で、いじめもセーフだという感覚を子どもが持つこともあります。小さいいじめが積み上げられていくと、どんどん長期化、深刻化します。いじめが起きやすい『不機嫌な教室』から、ストレス要因を取り払うことがまず大事です。それにとどまらず、だれもがより居心地の良い『ご機嫌な教室』にどう変えていくかを問題提起しています。……

いじめ対策法だけでなく、発達障害者支援法が施行されました。性的少数者の子どもへの支援や、不登校を法律で認めようという動きも出てきました。教室はもっとご機嫌なものに変えられると思います。」

## 「間接的にいじめをなくそうと思った」

白岩玄の小説『ヒーロー！』（河出書房新書）は高校が舞台の学校のいじめがテーマです。

2年生の男子生徒・英雄と女子生徒佐古は中学が同じでした。英雄は、いじめをなくせる解決方法を思いついたとって演劇部の佐古に演出の協力を求めます。

「いじめってのは、誰か特定の人に負の関心が集まるから起こるわけだよ。だったら教室の中で何か面白いことをして、みんなの関心を無理やりさらってしまえばいい。簡単に言えばさ、休み時間の教室に急にミッキーマウスが入ってきたら、みんなそれに気を取られて、いじめなんか絶対に起こらないと思うんだ」

佐古の受け止めです。

「うちの学校だけでもいじめの数は相当なものになるだろう。でもそれは仕方のないことなのだ。今みたいに社会全体が明確な方向性をもっていない時代には、誰かにベクトルを向けて暇つぶしをすることでしか日常を消化していけない。……この世からいじめはなくならない。だいたい大人の世界にあるものが、同じ人間の子どもの世界からなくなるわけがないだろう」

そう思いながらも佐古は英雄に協力します。英雄は大仏の面をかぶって校庭でショーを実行し、全校から注目を集めます。演出は毎日違います。

やり続けるために、英雄は直接校長に掛けあいます。校長室で校長が2人に質問します。「まずひとつめだけど、君たちは今やっていることで本当にいじめを防げると思うか。これは私が防げないと考えているわけではなくて、純粹に君たちがどう思っているかを知りたいんだが」

「僕は防げると思います」と英雄は明言した。

「わかった。じゃあもうひとつ。君たちがいじめをなくそうと思った理由は何かな？ なぜいじめをなくそうと考えたのか、それを教えてもらいたいんだ」

英雄が答えます。

「・・・幼なじみがいるんです。幼稚園のときからずっと一緒に遊んでいた。そいつは小二のときにいじめられて、学校に行けなくなりました。心の病気になって、だいぶ回復してますけど、未だにフリースクールに通っている状態です。俺にはそいつを守れなかったっていう負い目がある。だからいじめをなくしたい。それだけです」

沈黙のあと英雄がつづけます。

「俺が今のやり方でいじめをなくそうとしているのは、その幼なじみに言われたことが影響しているんです。俺がいじめをなくしたいと言ったとき、そいつはなるべく直接手を下さない方法でやってほしいと言いました。大人たちがするように、いじめの問題に直接手を下せば、人間関係にゆがみが生じて何かしらの遺恨が残ってしまう。悪い奴を叩けばそれで済むという問題ではないんです。下手をすれば余計に悪化して手がつけられなくなるだけだ。だから俺はみんなの注目を集めるやり方で、いわば間接的にいじめをなくそうと思

ったんです」

校長は2人の思いを尊重して他の先生を説得します。

## いじめは連鎖反応を起こす

佐古は英雄の幼なじみの公平に会いいじめのことを聞きます。

「僕と英雄は幼稚園が一緒だったんだ。でも小学校からは別々になった。僕は親の希望で私立の学校に入れられて、英雄は公立の学校に入学した。僕は英雄以外に友だちがいなかったし、人見知りで人付き合いも苦手だった。だから小二のときにいじめられた。相手は大人しい子だったんだけど、すごく陰湿ないじめをするんだよ。物を隠されたり、見えないところをつねられたり、それがあまりにも長く続いたから耐えられなくなって英雄に相談した。そうしたら英雄が怒ってさ、あの性格でしょ？俺が懲らしめてやるっていうんだよ」

「でも僕は暴力が好きじゃなかった。英雄がその子を傷つけるところを見たくなかったんだよ。だから二人で話し合っ、担任の先生に相談した。それで一時はおさまったんだ。でも告げ口したのが卑怯だって思われたのか、その子は少ししてから、前よりももっと激しく僕をいじめるようになった。両方の親が呼び出されて、何度も面談があつて、先生が厳しく注意したけど、その子はいじめをやめなかった。その代わりお母さんがね、そのいじめっ子の母親が、僕にずっと謝ってくれたんだ。控えめですごく気の弱い人だったから、何回も何回も、こっちが気の毒になるくらい頭を下げ続けてね。だから僕も、最初はその子のことを恨んだけど、途中で『もういいや』って思ったんだよ。このままじゃこの件に関わる人全員が疲弊していくだけだつて。でも僕がそう言っても、大人たちは止まらなかった。名門校のイメージを守りたいっていうのもあつたのか、先生たちはいじめをなくすことに躍起になっていた。正義って背中に追い風が吹くんだよ。みんな冷静さを欠いていたし、解決することを急ぎすぎた。それで結果的に、その気の弱いお母さんが自殺したんだ。きっと必要以上に自分をおいつめちゃったんだろうね、ノイローゼみたいになつたらしい」

「僕をいじめた子は、お母さんの葬式でいつまでも泣いていたよ。僕はそれを見て以来、学校に行けなくなったんだ。自分のせいじゃない、運が悪かつたんだと思おうとしても、どうしても思い出しちゃうんだよ。自分がもっとうまいやり方をしていれば、あるいは自力で解決する方法を見つけていれば、人が死ぬことにはならなかつたんじゃないかつて」

転校生の星乃が、チアリーダー部の柚木に英雄のショーへの協力を要請します。

「新島英雄くんは私みたいな学校になじめない子の居場所をつくってくれました。彼が一生懸命人目を引いてくれたから、私はみんなから変なふうにかられることが減つたんです。これまでの学校生活で、初めて呼吸が楽になつたんです。私と似たような苦しみを持つ人が、きっとウチの学校にはいっぱいいます。その人たちは自分から声を上げられない。我慢して、嫌だなんて思いながら平気な顔して、誰かが助けてくれるのを待っているんです。」

だからお願いします。どうかチアリーディング部の力を貸してください」

チアリーディング部は協力を了解します。

チアリーディング部とのコラボレーションを終えた英雄が漏らします。

「俺さあ、今までずっと、自分が学校の平和を守るんだって思っていたんだよ。でも別にそんなことしなくても、星乃と友達になったりさあ、今日みたいに、みんなと何かを一緒に作り上げることで生まれる平和もあるんだなーって思ったわ。・・・1人で抱えすぎていたのかな？」

## 「居場所というのは、その人の幸せそのものなんだよ」

校長はなぜ協力してくれたのでしょうか。佐古が聞いた話を公平に報告します。

「自分は長い教師生活の中で、いじめの問題に対して何もできなかったっていう感覚が強かったんだって。それで私たちからの提案を受けたときに、初めて何かができるかもしれないって思ったらしいの」

「君たちの提案を受けたのは、君たちの提示した方法が『生徒の居場所をつくるもの』だったからだ。君たちはショーをやることで人目を引いて、弱い立場の生徒に悪意を向けさせないと言った。それはつまり、教室の中に生まれてしまう差別的な空気を、いわば換気して取り払うということだ。理不尽な扱いを受けている生徒が、本来の自分のままでいられる環境を自然な形で作り出す。私はそこがいいと思った。

いろんな意見があるだろうけど、私は**学校で一番大事なことは、生徒1人1人の居場所があることだ**と思っているんだよ。教室でも、部活動でも、図書館でも保健室でもいい。それが1人の友達だっていいんだ。学校に自分の居場所があれば、生徒たちは学校に来る。別に学校に来ることがすべてではないけれど、嫌なことさえなければ、ほとんどの子どもは学校に行きたいものだからね。だから何よりも居場所を作ることを優先するように私は心がけてきた。でもただそれだけのことが難しい。・・・自分ではうまく居場所を作れない子だっているんだよ。居場所があるということが、その生徒にとってどれだけ大きな意味があることなのか理解されない。私は前から思っているんだが、**居場所というのは、その人の幸せそのものなんだよ**」

佐古は校長の話を公平に伝えながら言います。

「公平君が人を傷つけることの恐ろしさを教えてくれなかったら、私たちがこんなに結びつくこともなかったと思う」

公平はフリースクールを辞めて都内にある私立の学校に通うための準備を開始します。

英雄がどうせならウチの学校に来ればいじゃんと言ったが、それは甘えになるからと言って断ります。

「自分の居場所は自分の力で作りたいんだ」

学校のいじめは、「だいたい大人の世界にあるものが、同じ人間の子どもの世界からなくなるわけがないだろう」です。学校のいじめ対策と大人社会での対策は同じです。それぞれの挑戦を共有することが大切です。そしていじめなんてつまらないと思える「居場所」をみんなが参加して作りあげることです。

いじめの対応にマニュアルはありません。